



TITLE:

作品「城」の成立：カフカ「城」論 Ⅲ

AUTHOR(S):

佐藤, 康彦

CITATION:

佐藤, 康彦. 作品「城」の成立：カフカ「城」論Ⅲ. ドイツ文学研究 1965, 13: 29-47

ISSUE DATE:

1965-03-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184898>

RIGHT:

作品「城」の成立

カフカ「城」論 Ⅲ

佐藤 康 彦

作品「城」は、ベイスリイとヴァーゲンバッハの考證によると、一九二二年一月から同年九月にかけて書かれたものと考えられる。⁽¹⁾ カフカは、この長編を未完に残したまま、二年後の一九二四年に世を去った。

カフカの晩年の日記で注目されるのは、この「城」執筆期の前後、つまり一九一九年から一九二一年にかけて及び、一九二二年後半から死に至るまでの二つの時期には、僅か数ページの斷續する記述しか残されていない点である。これは、かなりのカフカ文献が散佚しているという特殊事情によるものではなく、この日記が十三冊のノートに書かれて残っている点からみて、作家自身に關する重要な事實と考えられる。⁽²⁾

ところで、これらの二つの日記の空白は、前期はカフカのミレーナとの戀愛體驗の時期（一九二〇—二一年）、後期は、療病生活、最後の伴侶ダイヤモンドとの出会い、そして病の惡化にそれぞれ對應している。そして、この二つの時期にはさまれたほぼ一年の間に、かなりの日記記述がなされ、同時に「城」が書かれていた。これらの日記を通して、「城」ととり組んでいたカフカの内面を窺うことができる。⁽³⁾ 日記記述を、不可能、というよりも不

要なものにしたに違いない激しいミレーナ體驗の後に、彼には再び、内省と志向の葛藤の時が訪れていたのである。

ところで、作品「城」を貫いている志向の持続性は、日記に見られる内省とどのようなつながりにあるのだろうか。晩年の日記記述を中心に「城」成立の一端を考えてみよう。

※

「昨夜は最悪の夜だった。すべてが終局であるかのように。」(S. 575)と一九二二年三月七日にカフカは短く記している。そして、すぐ翌日、彼はこう書く、「あれはしかし疲勞にすぎなかった。だが、今日のは、新たな額から汗を滲み出させるような攻撃なのだ。人が自分自身に窒息してしまふとしたら、それはどんな状態なのだろう？ 急迫してくる自己觀察によって、そこから世界へ吐き出される戸口が、あまりにも小さくなり、あるいはまったく閉ざされてしまふならば？ 僕は屢々こんな状態から遠くない……」(S. 576) 終局のような最悪の夜、だが翌日はいっそう苦しい窒息の夜がカフカを襲う。いわゆる、カフカの「出口なし」の状態である。さらにこの記述によって、世界への出口を彼から奪ってしまうものは、他ならぬ自己觀察の襲撃であることがわかる。觀察する自己と觀察される自己との葛藤にカフカは危うく窒息しかかってしまふ。彼の窒息は外部の事物の襲来によるものではなく、文字通り自分に窒息してしまふのである。

事實、カフカの日記で、終始、読む者を強い力でその中へ引きずり込んでしまふのは、この自己觀察の執拗さなのである。それは、單なる自意識といった恣意的なものではなく、むしろ彼に生涯課せられていた義務であつたとさえ思われる。前年の十一月の日記には、次のように書かれている、「自己觀察への逃れ得ぬ義務づけ。も

し僕が、誰か他の人に觀察されているならば、僕も當然自分を觀察せねばならぬ。もし誰にも觀察されていないのならば、僕はそれだけいっそう精密に自分を觀察しなければならぬ」。(S. 550)

これらの言葉に、現實剝離——自己と外部世界の間の戸口の閉鎖——、あるいは、關係妄想——他人に觀察されている云々——といった分裂症狀を指摘することも容易だろう。しかし、性向という問題や心理學的な見方よりも、ここに、誰にも觀察されていないならいっそう、というカフカの、義務をも越えて觀察を貫こうとする意志を見ることが出来る。日記におけるカフカの自己觀察は、自己満足や自己不信に陥込んでゆくことがなく、頓晦や妥協をめざす方便でもなかった。それは、窒息状態の中を、どこまでも進んでゆく。

「先週は一つの崩壊のようなものだった。」とカフカは一九二年初頭の日記で自己分析を始める——彼の内部と外部の生活は、二つの別な時計のように違う時を刻んでいる、二つの世界は齟齬をきたす、そして「内部の進行の狂暴さには様々な原因があるのだろう。最もはっきりした原因は自己觀察だ。それはどんな觀念をも休らわすてはくれず、あらゆる觀念を激しく追い立て、ついで、それ自身再び新しい自己觀察の觀念としてさらに追い立てられるのだ。」(S. 553) カフカは、このように、自己觀察によって生れる觀念を次々に觀察の餌食にしてゆく。觀念はたえず脅かされ、復讐される。例えば、こんな手ひどい仕うちがなされる、「僕は夜半すぎに眠り込んだ。五時に目が覺めた。常にない成果、常にない幸福。その上、僕はまだ眠い。しかし、幸福は僕の不幸なのだ。忽ち、抗し難い思いが襲ってくる、『こんな幸福にお前は値しない』と。復讐の神々は僕の頭上に襲いかかり……一日中僕をわなわなとした不安な氣持にさせる」(S. 557f) のである。カフカは、こうして「覺めて

いることも眠ることもできずに」(S. 552) 不安の中に生きなければならぬ。ところで、カフカの觀察は、それが日常生活の範圍における外部世界の觀察であつたとしても、常に右に述べ

た自己觀察と強く結びついてゆくことに氣がつく。外の世界は敏感に彼の自己觀察を呼び醒ます。例えば——彼は電車に乗る。一人の少女が降りようとする。その姿はまるで觸れてみたかのようにはっきりと彼に觀察される。その衣服・スカートの襞の一つ一つ・容貌・髪の毛・耳の裏・そしてそのつけ根の蔭になつてゐる部分までも……だが、その瞬間、彼は自己觀察の襲撃をうける、「彼女が自分に對して疑問も起さず、そんなことを一言も言わないでいられるのは、一體なぜなのだろう？」と。又、同じような記述が一九二二年にも見られる。そこでは、少年や少女達の行進に、そして、その一人一人に彼は目をとめる。新しく若い人達は、目前に迫つてゐるものも知らず、戦いの準備は整つてゐると信じてゐる。こんな彼等の無知の姿は、カフカを歡喜させる一方、「僕は決して救われやしないのだ」(S. 576) という彼の苦しい窒息を呼び起すのである。

このような外部と内面との關係は特殊なものだ。調和的な結びつき、あるいは、互いに他を助長するというつながりでないことはもちろん、両者が噛み合い、反撥し、闘い、そして勝敗を得るといった同一の平面に置かれてゐるのではない。いわば、ガラスで隔てられてゐるような感がある。そして、このガラスは少しの曇りもなく、透明であり、外の事物は容赦なく飛び込んでくる。それらは、先入觀念や懷疑の色あいによって選び取られてはゐない。無心の姿は無心の姿として、幸福は幸福として、そのまま受け取られてゐる。容易に反撥されたり、否定されたりしない。こちら側で窒息しながらも、カフカはこのガラスを覆おうとはしない。むしろ、あまりに透明なガラスの存在は、現實の空氣さえ忘れさせてしまうほどで、手を伸ばせば向う側の事物にすぐ觸れることができると感じられるほどののである。「闘を一步跨ぎさえすればすべてはよくなるだろう。」(S. 555) しかし、この一步が無限の距離をもつてゐる。彼の内部から外の世界へ通じる戸口はあまりに狭い、にもかかわらず、外界の事物はたちまち侵入してくるのである。——「内部の苦しみから、例えば中庭のそのようなある光景に至

る道は、なんと遠いことだろう。そして、歸り道のなんと短いことか。………」(S. 578)

外部とこのような異常な關係を保つことは、おそろしい緊張を生み出し、強靱な忍耐が要求されるだろう。カフカ自身既に觀察しているように、一方では狂氣に瀕し、他方では弱さに墮してしまふ危険に曝されながら(S. 570)、この緊張はどこまでも不安の中を辛抱強く歩きつづけようとしている。そして、この忍耐は、絶望よりもむしろ肯定の方へ、遠い希望の方へはるかに續いているように感じられる。日記の中には、時折、こんな一節がふつと現われる、「希望？」(S. 575)「どこかに救いが待っている。そして勢子達が僕をその方へと導いてゆく。」(S. 576)——これは、作品「城」の中でかすかに響いている鐘の音であつた。

「城」の主人公Kがこの鐘の音にひかれて雪の野を彷徨つたのと同じように、日記の中でもカフカは外の世界への出口をしきりに探し求めている。カフカはいつもガラスの方へ身體全部を開いている。従つて、外からの刺激はすべて彼に機會となつて誘いをかけることにもなる。例えば、「城」の終章で主人公Kを誘惑する給仕女ベービーの聲は、日記の中でもカフカに次のように誘いの聲をかけている。「會社の新婚の男達や年とつた既婚者達の幸福。僕には手が届かない。届いたところで僕には我慢ができないだろうが、やはり僕の性向を満たしてくれるにちがいない唯一つのものなのだ。」(S. 561)これは、結婚の幸福ということにとどまらない。實際、カフカはこの頃、若い友人に向つて、退社後、ある指物師のもとで大工仕事に精を出す喜びを洩らしているが、日記の中で、そのような自己を次のように敷衍している。「これまでの僕の一生は一所での足踏みにすぎなかつたという不安。なんとか僕自身の方から確證を示すような人生の歩みはまったくなかつた。それはちょうど、他のすべての人に與えられているような圓の中心が僕にもあつて、彼等と同じように決定的な半徑を伸ばし、素晴らしい弧を描くべきだったのに、とでもいうような人生だった。その代りに、僕はいつも半徑を引こうと駈け出しは

したが、たちまち止めてしまわなければならない、といったことの繰り返しだった。例えば、⁽⁵⁾と彼は自分が駈
 抜けそうとした方向を列挙する、「シオニズム、反シオニズム、語學、ゲルマニスティック、リテラトゥール、自
 分の家、結婚の試み」さらにそれは「ピアノ、ヴァイオリン、庭仕事、大工仕事」であってもよいのだ。しかし、
 「僕は、ふだんよりも少し速くまで半徑を伸ばそうとすると、まさにこの半徑の伸びた分だけ僕の事態はすべて
 の面で良くなるどころかいつそう悪くなってしまふ」(S. 560)のである。ここでは、克服という行為が、「克服
 という觀念の戯れ」(S. 555)を越えて出ることができずに苦しんでいるという具合である。このような飢餓狀
 態は、たしかに、*haltos* の症候を示し、また他面、屬すべき世界を知らぬ者、故に、義務として他に参加する
 ことを知り得ぬ者の、モラル・パニックだと言ふこともできるだろう。⁽⁶⁾

※

しかし、カフカは、このような「襲われた窒息」、「崩壊」そして「現實剝離」あるいは「モラル・パニック」——
 たとえそうであるにせよ——の中で、執拗に自己を観察し、そして、それを書いている。この「書く」という行
 爲が、彼に残されていた唯一つの克服の始めであった。もちろん、カフカはそれをはっきり覺っている。「[▽]窒
 息は想像がつかぬほど怖ろしいものだ[△]と書きつけることが許されているのは、ある種の幸福であることは否定
 し得ぬ。たしかに想像が及ばぬものだ、とすれば他方何も書きこまれなかっただろうに。」(S. 561) [▽]先週は完
 全な崩壊状態だった[△]と彼が書くとき、空白のまま口を閉じている先週の數日は、書いている今日のカフカより
 も、はるかにひどい日々だったにちがいない。「僅かでも書くことが僕に與えてくれるこの確固とした感じは、疑
 いようがなく、そして不思議なものだ。」(S. 336) やらに、「どんなことがあっても、また、どんな條件にあって

も僕は書くであろう。それは、僕が自分を維持してゆくための闘いなのだ。」(S. 418)とカフカは既に以前に言っている。

このように『観察』とは、所詮、それ自體に意味があったのではなく、それを『書く』ことによって初めて意味をもち始めるものと考えられる。自己観察にしても、『僕は』と書くことによって、自から他への轉回があった。一九二二年一月の日記記述の中にも、この消息が次のように述べられている。「書くことのもつ、注目すべき、秘密に満ちた、おそらく危険であり、そしておそらく救いをもたらす慰め。それは殺害者の列からの脱出であり、行爲としての觀察 (‘*Tat-Beobachtung*’) なのだ。」(S. 563f) 「そして、鋭くなったわけではないが、より高度なものとなった觀察のあり方が生み出されることによって、この『行爲』となった觀察は………いっそう獨立したものとなり、いっそうそれ自身の運動の法則に従いつつ、その道は、豫測し得ず、歡喜に溢れつつ昂まりゆく」(ibid) のである。作品「城」の世界の特徴をなしている、メタファーの展開、登場人物の性格喪失、時間と空間の異常性、プロットの不在、一元的な進行、未完性(循環性)そして、絶望的な状況にもかかわらず全編を底流している奇妙な明るさは、このカフカの言葉にその源を見出すことができるだろう。彼が『打ちかかり人を死に至らしめる者たちの列』(‘*Totschlägereihe*’) という語を用いる、この逃れ得ぬ自己觀察の望息は、『*Tat-Beobachtung*』つまり「書く」という不可思議な行爲によって昇華されてゆく。彼は「攻撃者の馬を自分のものとして逆用し」(S. 576) 豫測し得ぬ道を歡喜に溢れつつ駆けゆこうとするのだ。

ところが、この部分の記述に見られる、それ自身昂揚した調子と、ある時は澁滞し、ある時は性急な省略をも必要としている自己觀察の記述の間には、やはり、異なったものが感じられる。それは、作品「城」と「日記」の相異であるとも言えるだろう。因みに、右の引用部分のすぐあとには、明らかに作品「*Prozes*」の一部に加

えられるべき' Joseph K. の現われる数行の断片が書かれているのである。

カフカの日記の中には、創作作品の断片、ないし、書き始めの部分がかなり含まれていることに注意しなければならない。晩年の部分にも、この「Prozeß」断片があり、さらに、一九二二年二月十日の項では、不眠の自己觀察記述に始まり、それが媒介する一段の文をへて、作品断片へと移行してゆく様子がはっきりと窺われる。(S. 572f)

10. Februar. Schlaflos, ohne den geringsten Zusammenhang mit Menschen, außer dem von ihnen selbst hergestellten, der mich für den Augenblick überzeugt, wie alles, was sie tun.

Neuer Angriff von G. Es ist klarer als irgend etwas sonst, daß ich, von rechts und links von übermächtigen Feinden angegriffen, weder nach rechts noch links ausweichen kann, nur vorwärts, hungriges Tier, führt der Weg zur eßbaren Nahrung, atembaren Luft, freiem Leben, sei es auch hinter dem Leben. Du führst die Massen, großer langer Feldherr, führe die Verzweifelten durch die unter dem Schnee für niemanden sonst auffindbaren Paßstraßen des Gebirges. Und wer gibt dir die Kraft? Wer dir die Klarheit des Blickes gibst.

Der Feldherr stand beim Fenster der verfallenen Hütte und blickte mit aufgerissenen, anschließbaren Augen in die Reihen der draußen in Schnee und trübem Mondlicht vorbeimarschierenden Truppen. Hie und da schien es ihm, als mache ein Soldat außerhalb der

Reihen beim Fenster halt, drücke das Gesicht an die Scheiben, blicke ihn kurz an und gehe dann weiter. Trotzdem es immer ein anderer Soldat war, schien es immer der gleiche zu sein, ein Gesicht mit starken Knochen, dicken Wangen, runden Augen, rauher gelblicher Haut und immer, während er wegging, brachte er das Riemenzeug in Ordnung, zuckte mit den Schultern und schwang die Beine, um wieder in Taktschritt mit der im Hintergrund unverändert marschierenden Masse zu kommen. Der Feldherr wollte dieses Spiel nicht langer dulden, lauerte auf den nächsten Soldaten, riß vor ihm das Fenster auf und packte den Mann an der Brust. *Herein mit dir*, sagte er und ließ ihn durch das Fenster einsteigen. Dort trieb er ihn vor sich in eine Ecke, stellte sich vor ihn und fragte: *Wer bist du?* *Nichts*, sagte ängstlich der Soldat. *Das ließ sich erwarten*, sagte der Feldherr. *Warum hast du hereingeschaut?* *Um zu sehen, ob du noch hier bist.*

二月十日　不眠、人々とはんの僅かの關係もない、彼等の方から造られた關係を除けば。今のところ僕はそれが確かにあると覺らされてはいる、彼等の行なう全てのことと同様に。

Gの新たな攻撃。他の何らかのことよりも明らかにのは、僕が、右からも左からも強力な敵達に攻撃されて右へも左へも避けることができぬことだ。今はただ、前へと進むのみ、飢えた獣よ、道は食える餌、吸える空氣、遮るもののない生へと續くのだ、たとえそれが生命の背後にあらうとも。汝は衆を導く、偉大な至高き將軍よ、絶望せる者らを導き行け、汝以外何人も見出し得ぬかの雪の下なる山々の間道をぬって。汝に

力を與える者は誰？ 汝に明視の力を與える者。

將軍は崩れかけた小屋の窓邊に立ち、閉じることのできぬ眼を大きく見開いて、外の雪の中、にぶい月の光の中を行進してゆく部隊の列を眺めていた。時々、一人の兵士が隊列を外れて窓際に立ちどまり、顔をガラスに押しあて、しばし彼を見すえて、それからまた歩きつづける、といったふうには思われた。それはいつも別な兵士だったが、まったく同じ兵士のように見えた。がっしりと骨張って、肉づきのいい頬と丸い眼をし、荒れて黄ばんだ肌の顔である。そして、窓際を離れるときはきまって革具をきちんと直し、肩をピクッとすくめて、背後で相變らず行進し續けている兵士達の群と再び歩調を合わせるために兩足をヒョイと振り動かすのだ。將軍はこんな戯れをもう我慢できなかった。次の兵士に狙いをつけてその面前で窓をぐいと開き、その男の胸ぐらを掴んだ。「入れ」、彼はそう言っただけで兵士を窓から入りこませた。彼はその男を部屋の片隅へ追いつめ、前に立ちはだかつて問い質した、「お前は誰だ。」「誰でもありません。」兵士は不安そうに答えた。「思っていたとおりだ。」と將軍は言った、「なぜ中を覗いたのか。」「あなたがまだここにおられるか見るためです。」

この日の日記は、例のように『不眠』の記述で始まっている。しかし、それはカルテのような客觀記錄でもなければ、病人が訴える悲嘆の調子もない。さりげない *schlatos* という語は、例のごとく難澁する自己觀察へと移ってゆく。そこに記されている状態は、既に觸れた「外からはあまりにも近く、内からは遙かに隔絶された、出口なし」の最悪状態である。省略がなされ、性急さを感じさせる文であるが、カフカの自己分析は、危うく崩

壊を支えているような張りつめた冷静さを失ってはいない。

次の段落にもこの分析が続く。外の世界から容赦なくやってくる攻撃に *ich* は追いつめられてゆく。だが、ここで轉回が生じる。„……, nur vorwärts, hungriges Tier, führt der Weg zur ……“ („……, ただ前方へ、飢えた獣よ、道は通じる……“) カフカは *ich* と書くことによって既に *er* への道に立つのだが、この過程がさらに作品を書く場合にも一つの働きをなしていることが、この轉回から明らかにされる。つまり、觀察された *ich* が次第に追いつめられ、もはや逃れ得ぬ土壇場で、突如、*hungriges Tier* と呼びかけられる。今はもはや前へと進むのみ、という願いをかけたこの呼びかけは、痛切な響きをもっている。觀察される自己、絶えず脅かされる自己の窒息状態は、否應なしに觀察する自己をもこの危険の中へ引きずり込もうとする。いわば、この窒息の中で彼のすべてが終局に立たされようとする、その瞬間、觀察と被觀察という場を越え、彼のすべてを覆いつつむように、この痛切な呼び聲が發せられるのである。それは、たしかに、新たな *er* への道であるけれども、日記に渦まく暗い窒息や觀察の襲撃、そして崩壊状態を越えた、究極の、いわば、カフカの生命力そのもの、生きることへの本能的な願いといった、生々しい、血なまぐさい、貪婪な意志でなければならぬ。それは、文字通り、餌と大氣へ向って跳びかかってゆく「飢えた獣」なのである。この時、もはや、呼びかける者と呼びかけられる者、觀察者と被觀察者といった分離は、なんの意味もない。*hungriges Tier* とは、カフカ自身カフカの意志そのものに同化され、一つの生きものとして、行爲へと突き進んでゆく。もし、人稱代名詞で呼ばれるならば、*er* ではなく、神に呼びかけるときの *du* でなければならぬ。かくて *hungriges Tier* は、*du* と呼ばれる *großer langer Feldherr* にそのまま移しかえられて、人間として行爲し始める。そして、この *Feldherr* に力を与えるのは誰？ という疑いがたとえ兆したとしても、それは一つの意志として、明視を

与えられる者の決意として克服されねばならぬ——最後の終止符に終る一文には、そんな響きが隔されている。この段の氣負った激しい語調は、以上のようなカフカの切迫した意志の表出によるのである。

こうして生れた Feldherr は、もはや、カフカの暗い内部に引き戻されたり、崩壊の中に沈みこむことがない。たとえ、崩れた小屋の中に位置し、外の世界から脅かされようとも、彼は毅然として目を見開き、窓からじっとそれらの者の姿を明視する。それどころか、外の者に向って自から攻勢に出る。將軍と外の雪の世界を隔ていたガラスはぐいと引き開けられる。彼は兵士を窓から引きずり込んで問ひ質す……これは既に作品の世界であり、そのまま「城」の世界へと通じる。カフカの作品に見られる叙事的な簡潔さと硬い平明さをもったこの段の文體には、第一段にみられる性急や第二段にみられる氣負いが姿を消している。文はそれ自身の道を自由な生命の方へと向って歩み出しているかのようだ。▽將軍△が、この無視された奇妙な立場を捨て、彼の失われた將軍の權利を求めて、この小屋から雪の中へ足を踏み出すならば、それは「城」の▽K△に他ならない。「將軍」という名のもつ誇りと、彼の攻勢とは十分にこのことを豫想させる。

「城」との共通性はまだある——窓際に立ち停っていちいち中を覗きこみ、「再び歩調をとるためにヒョイと足を振り動かす兵士」の奇妙なフモールを感じさせる姿は、そのまま「城」の測量助手や使者達の姿であり、將軍と兵士の間にかわされる緊張した問答は、あの對話の葛藤そのものである。そして、背景は同じように、雪に埋もれた村……このように、日記は ich と er の葛藤の場であるとともに、この窒息の淵から Feldherr へ跳躍しようとする足場でもあった。

カフカは、一九二二年一月二十七日から二月下旬までのほぼ一ヶ月を、雪に埋もれたシュビンデルミュールで孤獨に過していた。「城」が書き始められたのは恐らくこの期間だろうと推測される。⁽⁸⁾

この年の日記は、まず、一月十六日の、前に引用した執拗な自己分析に始まり、瞬間に安らうこともならず（十八日）、観念から生れる不安は観念を捨ててなお彼を脅かす（二十三日）。その間にも、手の届かない外界の事物が絶えず誘いをかける（十九日・二十一日）。このような窒息の夜がつづいた後に、二日間の日記の空白があった、カフカはシュビンデルミュールへ出發する。

その夜、この地で書かれた日記記述——先に引用した『書くこと・行為となった観察』の昂揚を謳い、「[Prose3]」断片がそれにつづく——には、ブラハの家と仕事を離れて、作品への飛躍を為そうとするカフカの氣持が反映している。さらに、翌々日の次のような記述は、「將軍」断片と「城」の昌頭、Kの村への到着場面を思い出させる。「一月二十九日、夕方の雪の路上での攻撃。絶えず様々な観念が錯綜する。例えばこんなふうに、この世界での状態は怖ろしい、このシュビントラームミュールにたった一人、その上、暗闇の中、雪の中でたえず足を滑らせる淋しい路上。それにこの道は地上の目標をもたぬ無意味な道だ。（橋に通じているのか？ なぜそこに通じるのか？ それにしてもそこまで行ったことは一度もない。）しかも僕だってこの土地では孤獨なのだ。……」(S. 565) 異邦人としてやって來たこの村で、人々との交渉や、襲ってくる觀察の攻撃に耐えながら、二月十日の「將軍」断片が、そしておそらく「城」昌頭が書き出されたにちがいない。

カフカは二月二十日頃ブラハに戻り、久しぶりで役所に出勤する。日記は途切れがちになり、最悪の夜がつづく。三月十五日、友人達の前で「城」の一部を朗讀したことを窺わせる記述がみえるが、その他に、斷續する日記からも、又、友人宛の手紙からも「城」に關する手がかりをつかむことができない。恐らく「城」執筆は滯滯

していたにちがいない。⁽⁹⁾彼は、そのまま、六月二十三日再び療養のために末妹オトラと共にブラナーへ赴く。この地から友人に宛てた手紙には、シュピンデルミューレに着いたときと同じような喜びが記されている。ブラナーでは三ヶ月近い療養生活が送られているが、日記は、ただ一日、七月二十三日の記述がみられるにすぎない。そして、そこには、「城」の村人達の姿を思わせるブラナーの農民の姿が書かれている。

九月半ばを過ぎてブラナーに歸ってきたカフカは久し振りで日記に向う。——「九月二十六日、二ヶ月間なにも記入しなかった。いくどか中断したが良い時だった。これもオトラのおかげだ。数日前から再び崩壊。その最初の日、森である種の発見をした。」(S. 584)『良い時』とは、おそらく、カフカが、日記の空白を越えて「城」を書くことに没頭し、克服の良い時を味わっていたことを意味するのであろう。シュピンデルミューレで書き始められた「城」は、大都會ブラナーを離れたブラナーの村での生活の中で、「獨立した、それ自身の運動の法則に従って」進行をつづけていたにちがいない。作品の背景となっている『雪に埋もれた村』という点からだけではなく、この『良い時』のもつ意味からしても、「城」は二回の田舎での療養生活と切り離すことはできない。もちろん、「城」の世界は、既に考察したように、本質的に都會の、複雑な機構とその中にうごめく人間の世界であるが、カフカはこの都會を離れることによって、いっそう明確に、單純化され抽象されたそれらの本質を *fatbeobachten* してゆくことができたのであろう。

以後、日記は、同年十一月四日、發熱し書くことができぬことを伝える短い記事と、十二月十八日、終日臥ってキエルクゴールを讀んだ記事を経て、翌年六月十二日の十數行の記述で終っている。

カフカはしばしばキエルケゴールを讀んでいる。⁽¹¹⁾ たしかに、絶望的に自分自身であろうとしない弱さと絶望的に自己であろうとする反抗が表裏をなしている孤獨の状況において、兩者に通じるところがあるけれども、克服しようとする志向には相異がある。單獨者が倫理的段階の極限において宗教的段階の救いに身を委ねようとするキエルケゴールの轉回、カフカには見られない。カフカは、キエルケゴールの道を、強い意志の力と讃嘆している。(S. 512) だが、一方、カフカの場合も、日記の中に、弱さとか罪といった言葉が吐かれたとしても、彼はその中へ沈みこもうとしない。彼は「飢えた獣」のように、行爲としての觀察、書くことへ、文學の道へと志向してゆく。

カフカにおける、文學への没頭、創作への志向、そして、書く者と作中人物の同一化は、他の作家にみられる、作品への没頭、作品構成の意欲、そして作者の作中人物への分身化とはちがっている。それは、以上に考察した内面から文學へ至る過程の差異であるとともに、意識的な作品構成とプロットの計算に關する作者の態度、さらに、書かれたものが書く者にはね返ってくる怖ろしい力の相異でもある。⁽¹²⁾

カフカは、ブラナーから友人に宛てた手紙の中で、「書くことによって自分をうけ出すことはできないのです。」(Briefe: S. 385) と洩らしているが、彼は、畢竟『書くこと』にも安らうことができないのである。「城」を朗讀した日、彼はこう日記の中で言っている、「克服した土地に遁れ、そして忽ちその地が堪えられなくなる。まだ生れぬうちにもう街を歩きまわり、人々と話すのを強いられること。」(S. 577) 彼は、克服されたものに堪えられぬ。『書かれたもの』が彼を苦しめる。それが彼自身の弱さの自己證明にすぎぬという惧れからだけではなない。書くことは、虚榮や享樂欲という惡魔的なものに仕えることによって得られる甘い報酬でしかない。(Briefe: S. 384f) そして、人前に出すのは止むを得ぬ事情からだ。(Briefe: S. 379) という自覺⁽¹³⁾

に背後から引き戻されてもいるのである。カフカは、書いていけるいかなる瞬間にも脅かされつつづけていたにちがいない。「城」を書き始める直前一九二一年十二月の日記には、次のような、メタファーに對する疑いが述べられている。「十二月六日　ある手紙から、ヱ僕はこの悲しい冬これで自分を暖めます。△メタファーは書くことに僕を絶望させる多くのもののうちの一つだ。書くことの非自律性、煖爐に火を入れる召使女に、爐端でぬくもっている猫に、そして、身を暖めている哀れな老人にさえも依存しているのだ。これらの者たちはすべて、獨立した、自分自身の法則をもった働きである。書くことだけが、よるべく、それ自身に安住せず、戯れであり絶望なのだ。二人の子供が、家の中にただ二人きり、大きなトランクによじのぼり、蓋はボタンと閉まる。開けることができず彼等は窒息した。」ヱ行爲となった觀察△として昂揚しようとしたメタファーは、書くカフカを安らわせてくれぬ。それは、煖爐の火のようにには彼の身體をぬくもらせはしない。この冬の日の、焦立たしい、たたみかけるような記述は、書くことでさえ、分裂の危殆に曝されるカフカの苦しい嘆きであり、また、ヱ家の中に二人だけ残された子供△のよるべない窒息の豫感なのである。

「城」は、にもかかわらず、その冬まもなく書き始められ、およそ半年の間書きつがれていった。そして、九月、ブラナーの地を離れるとともに中絶される。⁽¹⁴⁾

カフカが「城」に結末を與えることができなかったのは當然のことのように思われる。それは、未完に終ることによって、無限の中へ入りこんでゆく。そして、日記も最後、次のように終っている。「一九二三年六月二十三日……………書くにつれて次第に不安は増してゆく。これは明白なことだ。一つ一つの言葉は靈の中で向きを変えられ——この手の働きは靈の働きの特徴でもあるが——投槍となって話し手に向って返ってくる。このような自覺はまったく不思議なものだ。そして無限の中へと入り込む。慰めがあるとすれば、お前

が望むと否にかかわらず、それは起るであろうということ。そして、お前が望むことは目につかぬほどの僅かな助けにしかない。慰め以上のことは、お前も武器を持っているということだ。」(S. 585)

その一本一本が残らず、書く者へ向って激しく撥ね返ってくる投槍を、カフカは必死になって投げつけていた。しかも、彼はそれを自覚しながら、無限に投げつけた。『書くことだけがよるべない』という絶望と、『書くことが僕を支える』という意志との絶対の矛盾に面と向って、醒めて、書くという行爲をつづけてゆくとしたら、このような極限の行爲は、彼自身がふと洩らしたように「祈り」⁽¹⁵⁾となってしまうものなのかもしれない。その『武器』が祈りの言葉であるか、あるいは *kritzeln* であるかの違いがあるにすぎない。最後の日記記述からは、自己放棄の響きをも聞きとることができる。カフカは、自己の生きた記録をすべて抹殺してくれと遺言することによって、この自己放棄を完成しようとしたのではなかったろうか。

(註)

- (1) Malcolm Pasley u. Klaus Wagenbach : Versuch einer Datierung sämtlicher Texte Franz Kafkas, Deutsche Vierteljahrschrift 38 Jg. 1964, S. 159
- (2) Max Brod Nachwort zu Tagebüchern F. Kafkas, Franz Kafka : Tagebücher S. 724f. Frankfurt a. M. 1951 なお本文中の日記引用文はすべてこの版による。
- (3) 日記を考えるとき注意しなければならないのは、それが、後日の発表を期して、あるいは、他人の目に触れることを予期して書かれたもの——その場合、日記はより作品の領域に足をふみ入れる——ではないかという点である。カフカの場合は、作品の発表すら極力避けられており、又、すべての記述を破棄するように遺言されている事実から見て、さらに以下に考察する日記記述そのものの内容から見て、彼の内面と日記とのつながりは密接であり、より直接的な表出がなされていると考えられる。
- (4) Gustav Janouch : Gespräche mit Kafka, Frankfurt a. M. 1951 S. 16

なぐ、若う Janouch は Kafka と交際

し、彼に傾倒したのは一九二〇年春から翌年春にいたるはば一年の間で、ちょうど Kafka が Milena 夫人と知り合う頃とかきになっている。Kafka はこの仲びようとする文学青年の崇拜に對して、かなり氣輕に自己を打ち明けており、Janouch もそれを忠實に記録することによつて、この時代の Kafka の日記の空白をかなり埋めてくれている。

(5) ここで Kafka は Literatur と書っているが、彼はこの語と Dichtung とを區別し、前者を麻酔剤、後者を覚醒剤と云ふ比喩を用いて説明している。(Janouch, *ibid.*, S. 31f.) 従つてここを言っている Literatur とは、後述する Kafka の『書くこと』文学への役頭とは違つた意味をもっている。

(6) Günther Anders, *Kafka Pro und Contra* München 1961 S. 28f

(7) 編者プロートの後記によると、現存している人の場合、日記原稿にある人名は頭文字ないし不定の活字によつて代えられている。従つて Angriff von G. はカフカの生活上の事実だったのだろうか、それよりも、この攻撃にさらされる彼自身の自己觀察が喚起されてゆく点がより重要である。

(8) プロートは、「城」執筆時期を正確には知らず、ただ、その一部が朗読された一九二二年三月十五日からそう遠くない頃だったろうと推測している。(M. Brod: *Franz Kafka, eine Biographie* Frankfurt a. M. 1944 S. 227) 又、ヴァーゲンバッハの考証は、以下の本文に引用する一月二十九日のシビエンデルミューレでの日記記述をその最初の根拠としている。(ibid.)

(9) 四月頃に書かれたと目されるクロップシュトゥック宛の手紙には、「僕は、神經と称されるものから自分を救い出すために、暫く前から書くことを始めました。夜七時からなんとか机に坐ります。でも、どうにもならないのです、戦争のとき爪で防壁を引掻いているようなものです。来月にはそれもおしまいです。役所が始まるのですから。……」とあり、さらに 月末の同人宛の手紙には、医者も異議をとなえている勤務を前にして、「せめて一年の間、僕はノートと共に身を隠して誰とも話したくないのです。……」と書かれている。(Briefe S. 374)

(10) 「城」の村は、直接これらの土地を素材にしたとは言えない。カフカの作品の場合はそのような素材のとり方によって生れるのではなく、觀念の裡につき重ねられた、より抽象的なものである。因みに、ヴァーゲンバッハによると、カフカは八才のとき祖父の墓を田舎に訪れており、その地の印象が遠く「城」の雪村に再現されていると推測しており、(K. Wagenbach: *Die Jugend Franz Kafkas*, Merkur 129 XII Jg. 1958 S. 1019f.) また一九一七年秋から翌年夏に

至るチューラウでの長い療養生活が、大地に根を下して生活している人々のいる田舎での体験として深められ、後年「城」成立のための一つの原因となった、とプロートは指摘している。(M. Brod, F. Kafka, eine Biographie S. 200f.)

- (11) 例えば、一九一三年の日記には次のようにみえる、「今日、僕はキエルケゴールの『士師記』を手に入れた。前から感じていたが、彼の場合は、本質的な相違にかかわらず、非常によく僕の場合と似ている。少くとも彼は僕の世界と同じ側にいる。彼は友のように僕を確かめてくれる……」(S. 318)

- (12) 「城」にこれらが欠けていることは既に考察したとおりだが、カフカは日記の中でこの問題を、友人 Weib の小説構成法に関連して、「僕は、静止か、一歩一歩か、あるいは走ることを求めるが、しかし、いながらのような計算された跳躍は認めない。」と語っている。(S. 339)

- (13) G. Janouch : a. a. O., S. 22f.

- (14) 九月十一日プラナーからプロートの許に寄せられた手紙はこの中絶について触れられている。「……今週僕はあまり楽しくない日々を過しました。(というのには僕は城の物語をおそらく永久に放置しなければならなくなりましたからです。プラハへの旅の一週間前に始ったあの「崩壊」以来、それはつき穂を失ってしまったのです。プラナーで書かれた分は、君が知っている部分はどひとつくはないのですけれども。)……」(Briefe S. 413) * カフカは八月上旬四日間プラハに戻っている。

- (15) G. Janouch a. a. O., S. 22f.